



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2777 号 2015.12.18 発行

「時間過ぎるの遅すぎる」

介護施設で寝たきり 記者が体験

介助を受けながら昼食を食べる。肘が自由に動かせないから、口に持っていくのが一苦労＝岐阜市の寺田ガーデンで

高齢で寝たきりになり、介護を受ける気持ちってどんなものなんだろう。そんな素朴な問いから、記者(32)が介護施設で寝たきり介護を受ける体験をした。高齢者介護の現場を取材して1年半。介護を受ける側から、現実の一端を垣間見ることができた。(諏訪慧)

「まず、おむつを着けましょう」

介護福祉士のこの一言から私の一日施設入所は始まった。体験させてもらったのは岐阜市の介護老人保健施設「寺田ガーデン」。この道20年のベテラン、平子久美さん(58)らが介護してくれることになった。

高齢者を疑似体験するため、膝と肘にサポーターを巻いて曲がりにくくして両足首に3キロ、右手首に1キロの重りを付けた。

おむつを着けるのは乳幼児期以来。すっぽんぽんで着けるのはちょっと抵抗があったので、ズボンの上にしてもらった。横になると、慣れないおむつの締め付けが気になった。

午前9時に始まった私の介護。ベッド脇のテレビを見始めて、ほんの十分で背中が痛んできた。寝返りを打ちそうになるが、今日は寝たきり体験なので、ガマンガマン。おむつのせいか尻のあたりがかゆくなり、目を閉じても眠れない。

2時間ほど耐えた後、車いすに乗せられて別室に移り、お年寄りたちと一緒に体操。バキバキに凝った体に心地良い。

正午からはやっと昼食だ。メニューはかに玉。ミキサーにかけた後に軟らかく固めてあり、のみ込みが不自由な人向け。味はかに玉なのに、歯応えがなくのど越しも違うため、食べるのに苦労する。しかもスプーンがうまく口に運べない。見かねた女性の職員の方が「どうぞ」と食べさせてくれた。優しい笑顔と手慣れた介助がうれしい。

食事を終えて、ベッドに横になること3時間。時間が過ぎるのが遅すぎる。休みの日の昼間に3時間もベッドにいられたら幸せなのに、寝たきりだと、なぜこんなにつらいのか。

「お風呂ですよ」。今度はベッドから滑車付きのストレッチャーに移され、風呂場へ移動。洋服を脱がされた。普段は自分で全部やるのに、「なされるがまま」というのは何とも妙な気持ちだ。「お湯加減はどうですか」。かゆいところに手が届く気遣い。最初の気恥ずかしさも、手際良さに徐々に意識が薄れた。

入浴を終え、おやつを食べて午後4時に体験を終了。「歯応えのある普通の食事を食べたいと思った。風呂やトイレも自分でやりたい」。そう感想を告げると、「体の状態に応じた食事をし、必要な介助を受けるのは恥ずかしいことではありません」と平子さん。寺田ガーデンはリハビリを充実させて在宅復帰にも力を入れているといい、「住み慣れた地域で自

中日新聞 2015年12月16日



立した生活を送るのが一番。体験で得た思いを大切に」と教えてくれた。

いつまで・・・不安よぎる

寝たきりになると意思の疎通が十分に取れなくなることが少なくなく、日々の取材で思いを聞き取るのはなかなか難しい。「だったら自分が寝たきりになってみよう」。そう思い立ったのがきっかけだった。

ベッドでじっと横になり、窓の外を眺めながら抱いた思いは、「このままの暮らしが続くとしたら、つらいな」という不安だった。

介助に当たってくれた平子さんらはいつも笑顔で、緊張や不安を取り除いてくれた。でも、自分で体を動かして、好きなときに好きなことができる暮らしをしたい。寝たきりの人の多くも、同じ思いなのかもしれない。

タンデム自転車、都心での解禁は？ ネックは先導役不足 丑田滋、阿部朋美、歌野清一郎

朝日新聞 2015年12月18日

タンデム自転車が公道全般で走れるのは

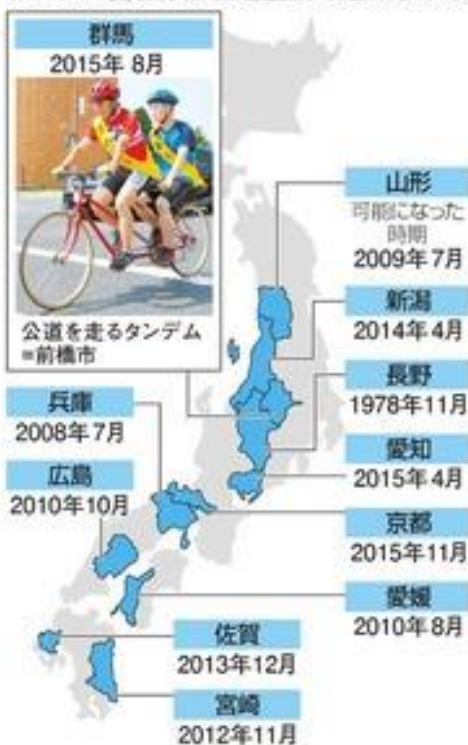
2人乗りのタンデム自転車が公道を走れる地域が増えている。7年前までは長野県だけだったが、今年、愛知、群馬、京都の3府県が加わって11府県に。なぜいまタンデムなのか？

10月中旬、兵庫県の淡路島。海沿いの道を9台のタンデム自転車が駆け抜けた。NPO法人「サイクルボランティア・ジャパン」のイベントだ。ハンドル操作がいらぬ後部座席に視覚障害者や知的障害者が座り、ペダルを懸命にこいでいた。普通の自転車より、車体が2・4～2・5メートルと長いのが特徴だ。全盲の飯田育生（いくお）さん（52）は浜松市から参加した。「風を感じられるのが魅力。1人では行けないところに行けるのが楽しい」と声を弾ませる。地元の静岡県では「安定性がある」（県警）として三輪のタンデムなら公道を走れるが、「二輪の方が軽くて乗りやすい」と飯田さん。折りたたみの二輪タンデムを持参し、各地のイベントに足を運んでいる。

タンデム自転車は、道路交通法上は公道を走れるが、都道府県の公安委員会が走行できる道路を限定したり、三輪に限られたりするケースが多い。警察庁によると、二輪のタンデム自転車が公道全般を走行できるのは、山形▽群馬▽新潟▽長野▽愛知▽京都▽兵庫▽広島▽愛媛▽佐賀▽宮崎の11府県。

何が、解禁の決め手だったのか。普及を目指すタンデム自転車交流協会の岡田勝博事務局長は「県や県議会に障害者団体などが要望して前進するケースが多い」と話す。

タンデム自転車が公道全般で走れるのは



1人3万円の臨時給付金支給、自民が一転了承

読売新聞 2015年12月17日

自民党の厚生労働部会などの合同会議は17日、65歳以上の低所得者に1人あたり3万円の臨時給付金を支給することを了承した。

政府は2015年度補正予算案に事務費も含めて3620億円を計上し、65歳以上の約1130万人が対象になる。16年度予算案にも450億円を計上する方針で、65歳未満で障害基礎年金、遺族基礎年金を受給する約150万人にも3万円が支給される。

16日の合同会議では、若手議員らから「バラマキだ」などの批判が相次ぎ、了承が見送られていた。17日の会議では、稲田政調会長が「将来世代に負担を先送りしない社会保障制度改革の議論の場を作るので若手に参加してほしい」と述べ、理解を求めた。稲田氏は、自身が委員長を務める財政再建特命委員会で取り上げる方針だ。

一般会計、96兆円台後半＝社会保障増を抑制－16年度予算案

時事通信 2015年12月17日

政府は17日、2016年度の一般会計予算案の歳出総額を96兆円台後半とする方向で調整に入った。過去最大だった15年度当初予算（96兆3420億円）を上回るが、社会保障関係費などを抑制し、同じ96兆円台に抑える。24日に閣議決定する。

歳出の3割を占める社会保障関係費は高齢化を反映して32兆円台と過去最大になる見込み。ただ、医療サービスの公定価格である診療報酬の減額を通じ、15年度当初予算からの増加幅を5000億円弱に抑制することを目指す。

防衛費は初の5兆円台に乗せ、公共事業費はほぼ横ばいの6兆円弱となる見込みだ。この結果、国の政策経費は15年度当初予算並みの73兆円規模となりそうだ。

歳入は、税収が企業業績の好調を追い風に57兆円台半ばとみており、1991年度以来の高水準になる見通し。新規国債発行は34兆円台に抑える。

マイナンバー配達「16日までに完了」 日本郵政社長

日本経済新聞 2015年12月17日

日本郵政の西室泰三社長は17日の記者会見で、傘下の日本郵便による税と社会保障の共通番号（マイナンバー）制度の番号通知カードの配達を「16日までに完了した」と述べた。印刷漏れなどで遅れた一部地域を除き、約5600万通の初回配達を終えた。

これまでに90%に当たる5121万通が本人の手に渡った。初回配達時に不在で、郵便局の保管期間に受け取らなかった551万通は自治体に送り返されており、本人にどう届けるかが課題として残っている。

ゆうちょ銀行への預入限度額を含む業務規制については「早期に規制緩和を実現してほしい」と要望した。自民党が6月に1千万円から段階的に3千万円まで引き上げるように提言。これを受けて政府の郵政民営化委員会（委員長・増田寛也元総務相）が引き上げの是非を議論している。

インフル注意報発令 今季初

読売新聞 2015年12月18日

県は17日、県内がインフルエンザの流行期に入ったと発表した。北秋田保健所管内では、1定点医療機関当たりの患者数が18・33人と前週の6倍を超え、今シーズン初の注意報が発令された。県健康推進課は「うがい、手洗いをこれまで以上に徹底してほしい」と呼びかけている。

同課によると、県内では、北秋田や秋田市など6保健所管内で患者数が増加。全体では、1定点医療機関当たり、前週の0・61人から2・39人と約4倍に増えた。

インフルエンザの集団発生も相次ぎ、10日以降、北秋田市の障害者支援施設と保育園で各10人以上の患者が出たほか、秋田、北秋田、男鹿市の計4小学校で学年閉鎖や学級閉鎖があった。

【正論】トランプ氏はアメリカの「病」か 福井県立大学教授・島田洋一

産経新聞 2015年12月18日

《暴言の背後にあるメッセージ》



不動産王、ドナルド・トランプ氏の勢いが止まらない。一つの暴言を次の暴言で直ちに忘れさせる能力は瞠目（どうもく）に値するが、放言癖を誇示する、品格のない金持ちならアメリカに掃いて捨てるほどいる。説明されるべきは、その中でなぜトランプ氏だけが、共和党の大統領候補としてトップを走り続けているかである。

「メキシコは最悪の連中を送り込んでいる」に始まり「イスラム教徒の入国を全面停止せよ」に至るトランプ氏の暴言の背後には常に、「無秩序な異邦人流入から勤労アメリカ人を守れ。無為無策の既存政治家にノーを突きつけよ」とのメッセージがあった。

以下まず、移民をめぐる米国の現状を見ておこう。

現在、アメリカにはヒスパニック（中南米系）を中心に、1200万人以上の不法移民がいるとされる。人口比（2・5対1）で日本に当てはめれば480万人超で、ほぼ福岡県の人口に匹敵する不法残留・不法入国者がいる計算になる。

ヒスパニック系米国人の投票行動を見ると、7割弱が民主党支持というデータが出ている。仮に不法移民に恩赦を与え選挙権を付与すれば、民主党が優位を得る選挙区が相当増えるだろう。オバマ大統領以下、民主党が重罪犯の強制送還にすら不熱心なのはナイーブな寛大ゆえではなくシニカルな党利党略、と保守派が批判するゆえんである。

一方、共和党においても、有力支持基盤の商工会議所が不法移民の雇用に対する罰則強化に懸念を示しており、党エリート層は厳格な法執行にやはり消極的である。「合法移民枠の拡大こそが不法移民への最大の抑止力。強制送還は可能でないし、アメリカの価値にも反する。話題にすること自体、民主党を利する」と、移民問題では民主党とほぼ同じ立場を取るジェブ・ブッシュ元フロリダ州知事を党エリート層が推すのは何ら不思議ではない。

《支持伸ばすトランプ現象》

なお合法移民についても、市民権を得た人の親族が優先される「連鎖移住」制のため、福祉に頼る人々が「雇用されうる能力」の高い人々を押しよける現象が見られ、保守派の間で問題とされてきた。トランプ氏は「連鎖移住」の抜本の見直しとともに、米国領内で出生すれば誰でも自動的に国籍を得られる「生得市民権」の不法移民・旅行者への不適用も強く唱えている。

現在、無条件の出生地主義を取る国はアメリカとカナダのみで、この点、トランプ氏の主張は国際常識にはずれたものではない。

「われわれの福祉システムにタダ乗りする者が、汗水垂らして働くアメリカ市民の負担を増やすことがあってはならない」「不法越境者が生む子に自動的に国籍を与えるほどばかな国はアメリカだけだ」といったトランプ氏のメッセージは、暴言の部分を除けばとりわけ排外的とはいえないだろう。

民主、共和を問わず既存政治家すべてを「ワシントン・カルテル」と切り捨て、不法移民の強制送還を唱えるテッド・クルーズ上院議員（共和党）が支持を伸ばしているのも、トランプ現象の一環と捉えうる。「中国や日本なら一体どうするだろうか」がクルーズ氏の口癖でもある。なお、クルーズ氏については、「自分だけいい子になろうとする」という同僚議員の反発が強く、支持層は草の根にとどまっている。

《日本は「際物」を笑えるのか》

トランプ、クルーズ両氏合わせて5割超の支持率を誇る中、正統レーガン保守のマルコ・ルビオ上院議員（共和党）が上位につけているのは、日米関係にとって一筋の光明と言える（ルビオ氏には「尖閣は明白に日本の領土」などの発言もある）。

ルビオ氏は次のような制度改革案を提示している。「合法移民については連鎖移住制をやめ能力に応じて受け入れる。永住権取得に当たっては米国史や公民の試験を義務づける。

不法移民については重罪犯や短期オーバーステイ者は本国送還、それ以外は、罰金を支払えば特別ビザを発給し、合法的就職を認める。福祉の受給資格は与えない。同ビザ所有者が10年を経た時点で永住権申請を認める。『生得市民権』廃止は憲法上難しいが悪用は防がねばならない」

以上のルビオ案は常識に適うと思うが、トランプ氏らからは甘すぎるとの批判が出ている。なおトランプ氏の「イスラム教徒入国停止」発言は、「過激イスラム主義者は敵」の一言をあくまで口にしないオバマ大統領らリベラル派への粗雑な反動という面がある。

翻って、日本社会では自由を利用して害をなそうとする敵対勢力や、福祉にタダ乗りを図る動きに政治はしっかり対応してきただろうか。朝鮮総連に自由な活動を許し、外国人の土地購入に無警戒であった日本が、反動としての「際物」トランプ氏を生んだアメリカを笑えるのか。暴言にとらわれず日本を振り返りつつ、アメリカ政治の行方を注視していきたい。(しまだ よういち)

福祉施設でアート取り組む 赤穂の図書館で作品展 神戸新聞 2015年12月18日

個性豊かな作品が並ぶ会場＝赤穂市立図書館



神戸市長田区の福祉施設「片山工房」でアートに取り組む障害者らによる作品展が、兵庫県赤穂市中広の同市立図書館で開かれている。身体障害や知的障害がある通所者17人が、水彩や油彩、サインペンによる絵など個性あふれる27点を出品。趣向を凝らして風景や動物、自画像を描いている。20日まで。

同工房は2003年、障害者らに表現の場を提供しようと、理事長の新川修平さん(41)が中心になって設立した。赤穂市での作品展は初めてで、新川さんが講師を務める関西福祉大(同市新田)と共催した。

絵筆を付けたヘルメットをかぶり、首を動かして創作する深田隆さんの作品は「深海の自画像」。自らの姿をチョウチンアンコウに見立てて描いた。

脳性まひのMAX山下さんは「人拓(じんたく)」に挑戦した。「自分の体を記録したい」と全身にペンキを塗り、用紙の上に横たわった。

新川さんは「作品にあふれる人柄を感じてもらえたら」と話す。

無料。午前10時～午後5時(20日は午後4時まで)。20日午後1時から新川さんが「人と福祉と芸術」の題で講演する。同図書館TEL0791・43・0275 (西竹唯太郎)

優勝 周囲に支えられ...君津・佐藤さん

読売新聞 2015年12月18日

◇ボウリング 障害者女子で

脳性まひで手足が不自由な君津市三直の佐藤幸子さん(45)が、11月に東京都内で行われたチャリティーボウリング大会の障害者女子の部で優勝した。今年2月、自宅が火災で全焼し、必要な競技用具も失ったが、地域住民が手作りで新調してくれた。佐藤さんは感謝の気持ちを胸に、連覇を目指して練習を続けている。(今井恵太)

佐藤さんは先天性の脳性まひで運動機能と言語機能に障害がある。19歳でボウリングを始め、「身の回りのことをやってもらってばかりだったので、自分で何かしたかった」という思いから、一気にのめり込んでいった。

一般のレーンを使い、障害の程度でボールの転がし方は様々だが、佐藤さんは滑り台のような木製の投球補助台から左手で押し出すようにする。レーンの木目を目印に数センチ単位で補助台の向きを足で動かしたり、押し出す強さや角度を調整したりしてボールをコントロール。ルールは基本的に健常者と同じで、最高スコアは232の腕前だ。

競技に欠かせない補助台を火災で失った2月のことを、佐藤さんは「ボウリングを諦めかけた」と振り返る。そんな中で支えてくれたのは、君津市職員の芝山鉄之助さん（63）だ。

佐藤さんが19歳でボウリングを始めたきっかけは、当時のケースワーカーだった芝山さんのアドバイスだった。芝山さんが「何とか続けさせてあげたい」と奔走し、市ボランティアセンターに登録していた須藤研一さん（78）が一肌脱ぐことに。

須藤さんは物づくりが趣味で、おもちゃ修理のボランティアをしているが、補助台を作るのはもちろん初めてだった。ボールが補助台からスムーズに転がるよう調整するのに苦労したといい、佐藤さんが練習する富津市内のボウリング場に10日連続で通ったこともあった。佐藤さんが使いやすいよう、ボールが転がる時間をストップウォッチで計るこだわりようで、完成までに2か月かかった。

そして11月、佐藤さんは日本ボウリング場協会主催の全国大会に千葉県代表として出場。須藤さん製作の「Sachiko」と書かれた補助台には芝山さんがボールをセットしてくれた。

2ゲーム合計387のスコアで2回目の優勝を果たし、「補助台はすごく使いやすく、本当にうれしい」と佐藤さん。大会翌日、佐藤さんと抱き合っただけで喜んだ須藤さんも「完成させる自信はなかったけど、一生懸命練習しているサっちゃんを見て何とかしてあげたかった」という。

佐藤さんは、これまでの大会で獲得したトロフィーを火災で失ったため、今回が新たな一歩。「補助台は体の一部のようなもの」と話し、新たな相棒とともに練習を重ねる。

愛知) 布団の端切れでアイマスク 専門学校生ら考案 松永佳伸

朝日新聞 2015年12月18日

田原市立田原福祉専門学校2年の土本実希さん（20）と松森綾音さん（20）が、市内の布団店と協力し、捨てていた布団生地の端切れを活用したアイマスク「しあわせ・ゆめマスク」を考案した。マスクの製造は地元の田原授産所が担当し、障害者の就労支援にもひと役買う。2人は「快適な眠りのお手伝いができれば」と話す。



布団生地の端切れでつくったアイマスクを手にする土本実希さん（左）と松森綾音さん＝田原市田原町

同市田原町の「マルキふとん店」の店主鈴木正敏さん（63）は長年、布団を仕立てる際に出る端切れの活用策がなく困っていた。今年8月、中心市街地の活性化に取り組む市民らでつくる「まちなか賑（にぎ）わいづくり実行委員会」に相談。「田原授産所の布製品に使ってほしい」と無償提供を申し出た。

そこで委員会のボランティア活動に参加している土本さんと松森さんに協力を求め、若者の視点で商品のアイデアを考えてもらうことにした。



障害者雇用率1・86% 4年連続上昇も全国33位 埼玉

産経新聞 2015年12月18日

県内に本社を置く民間企業の障害者雇用率（6月1日現在）が前年を0・06ポイント

上回る1・86%だったことが17日、埼玉労働局のまとめで分かった。平成23年に1・51%で全国最下位となって以降、雇用率は4年連続で上昇。全国平均は1・88%（同0・06ポイント増）で全国33位だった。法定雇用率（2・0%）を達成した企業の割合は前年比2・1ポイント増の45・8%だった。

障害者雇用促進法に基づき、雇用義務のある従業員50人以上の企業のうち2815社（前年比78社増）から報告があり、雇用障害者数は1万1531人（同465人増）だった。

企業規模別では、従業員50～100人未満が1・17%（同0・04ポイント減）で最も低く、100～300人未満1・60%（同0・07ポイント増）▽300～500人未満2・06%（同0・14ポイント増）▽500～1千人未満1・87%（同0・01ポイント減）▽1千人以上2・26%（同0・09ポイント増）と続いた。

産業別で法定雇用率を上回ったのは、宿泊業・飲食サービス業が2・34%（同0・04ポイント減）、複合サービス業が2・01%（同0・10ポイント増）で2業種のみ。法定雇用率の未達成企業のうち、障害者を全く雇用していない企業が65・0%（同0・4ポイント減）に上った。

一方、地方自治体（法定雇用率2・3%）では、県は知事部局や企業局、県警本部などを合わせた雇用率が2・74%（同0・08ポイント減）。羽生、草加、北本、富士見の4市が法定雇用率を満たさなかった。

県教育委員会は前年と同数の1・97%で法定雇用率（2・2%）を大幅に下回った。雇用障害者数は505人で、不足数の59人は全国の教委で最多だった。

特攻服ダサイ？ 最後の暴走族が解散 SNS使う“お手軽”暴走に警察は新戦術迫られる

産経新聞 2015年12月17日
道路を占拠し、広島県警の機動隊に突っかかる暴走族グループ。現在は形を変えた若者らの暴走行為が目立つ＝平成11年11月、広島市（画像を一部加工しています）



特攻服姿で違法改造したバイクにまたがり、集団で危険走行を繰り返す。そんなイメージの暴走族が今年、中国5県から完全に姿を消した。最後に1つ残っていた広島市内の暴走族が4月、広島県警に解散届を提出し、6月に活動実体がないと確認されたためだ。しかし暴走族とは認定されないものの、爆音を鳴らしながら走る若者らによる暴走行為は今もなくなっていない。最近はソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）を使って仲間を集め、走りた時に気軽に走るという新しい「走りの形態」が主流となっており、取り締まる側もそれに見合った対応が求められている。

今年の胡子大祭で逮捕された少年3人が使用したオートバイ＝広島市中区の広島中央警察署



広島県警によると、県内の暴走族数のピークは平成11年の44グループ計428人。当時は広島市中区の繁華街で毎年11月に開かれる胡子（えびす）大祭にあわせ、暴走族の“卒業式”が行われた。大きな通りや近くの公共広場は暴走族が占拠、数十人が円陣を組んで集会を行うなどし、通行人や付近住民から苦情が相次いだ。

こうした事態を重く見た県警は11年の祭りの際、防弾盾を持った機動隊員らを大量に投入して取り締まりを実施。道交法に基づいて解散命令を出したが、暴走族が応じなかったため、公務執行妨害容疑などで胡子大祭期間の3日間だけで45人、その後の35人を加えて計80人を逮捕した。

この事件をきっかけに、県は12年、暴走族追放条例を宮城県に次いで全国で2番目に

施行。県警も13年に暴走族対策課を新設して取り締まりを強化するなど、県内では暴走族の排除に向けた動きが活発になった。

こうした機運は民間でも高まりを見せた。スポーツ指導者の支援などを行うNPO法人「コーチズ」(広島市西区)は発足2年後の14年、県の青少年ケアサポート事業の一環として暴走族をはじめ非行少年らの就労支援を始めた。同法人は高齢者の運動不足を解消して要介護者を減らそうと、老人ホームなどで体操教室を開いており、少年らをその講師として雇用した。

「遅刻したり、服装がだらしなかったり、受け入れ側の施設から拒まれることもあった」。児玉宏代表は当初の苦労を振り返る。それでも「先生」と呼ばれた少年らは徐々に顔つきが変わり、仕事にやりがいを感じ始めたという。気がつけば6カ月間の雇用という当初の予定を大幅に超え、取り組みは3年間続いていた。

また、市内中心部では地元ボランティアが夜間パトロールを行い、公園などにたむろする少年らに声をかける運動を実施。活動を地道に続けた結果、たむろする少年は減り、暴走族の姿も次第に見られなくなった。

こうした努力が実り、広島県ではついに「暴走族ゼロ」を達成。同県を除く中国4県ではすでに数年前から暴走族がいなくなっており、中国地方全体で「ゼロ」となった。

しかし、信号無視や蛇行運転など夜間を中心とした若者の暴走行為がなくなったわけではない。広島県警によると、今年は10月末現在で県内のバイク騒音に関する通報は2193件あり、昨年同期比で14件増。平均して毎月200件程度になる。

また共同危険行為や信号無視などの道交法違反容疑による摘発は、同月末までに196件174人。特攻服着用など決まり事の多い暴走族と違い、SNSを通じて走りた時に気軽に集まるのが最近の傾向だ。通報を受けた警察官が現場に向かうと暴走を中断し、摘発できないケースもあるという。

若者を中心に使用が広まっている無料通信アプリ「LINE」では、仲間のグループ全員が書き込まれたメッセージを同時に共有することができ、誰かが「走らないか」と呼びかけ、「行こう」と応じた友人たちと走る。中にはSNSで呼びかけて知り合った人と、初めて会った日に一緒に走るケースもあるという。

今年の胡子大祭最終日の11月20日には、広島市内の16～17歳の少年3人が道交法違反容疑などで逮捕された。3人は中学時代の同級生で、日頃から暴走行為を繰り返していた。昨年の胡子大祭で別グループによるオートバイの暴走行為があり、「今年は自分らも走ってみよう」という話になったという。3人が呼びかけに使用していたのもLINEだった。

ネットというツールもそうだが、捜査関係者は「(規則に)縛られるのが嫌いな現代の若者らしい走り方に変わってきた」と指摘する。さらに、「暴走族のピーク時にみられた暴力団との関係もゼロになったとは言いきれない」と話す。

グループとしての存在はなくなったが、暴走行為は散発的に続いており、そこではSNSなどが利用される。取り締まる側もこうした新しい形態に見合った対応が迫られる。県警少年対策課は「新たな暴走族の結成を防止するため情報収集を行い、引き続き暴走行為の取り締まりを徹底する」としている。(森西勇太)

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

